

李撰文選

貞



李撰文選卷之四目錄

一 四季辭
 二 酒論
 三 解解
 四 掛衣曲
 五 卜宅詩
 六 琴茶書画文
 七 士農工商每
 八 松竹鶴龜頌

六味
 飛溪
 六味
 交櫻
 桃溪



李撰文選卷之四

一 曰季の辞

六味

人本有よあはれ何そ感あうんといはれと見侍り
了そ後よおやへりされいとそのかかりゆくや
しれり色の又孝よまかすてかうまひかへま
そこの色もあはれいと孝おくのみよあまひつ
世はさうさこのあはれあはれよあまひとてたつ
よはれとあひて大いさかきける高人のあひをさ
かりまよあはれは自然の感情あはれはさき
侍あま人のまよひたるあまよひてあつげはれ

さるは世の人れをあるおとせく冷しは師走の
月をふくして木の敷のまゐりてりつと煤竹枯置て餅は
音かぬくよおつてくよ親やくと喚うけはる塵よ
交りてりつめてしは物よぞ極やはうちかかんけ
箱蓋くの神代めさるふ年内のままよとて極
赤繩とくまらるよ海の中は布よ入るは雲も
交りてられ急く玉がはれけりひまけく熱の中ハ
おろしといは物と賣ゆるり一何づまの方よまぬ
ふよまらりしはる中よ極くくおろるはまの物ふ
と待て一杯のあつりのふまよと清く熱あると東坡を
物めは古人の端と用ひすはよまらりしはる極

酒施り嬌と忍れて涼く自代とまめりしは
神保よこそ今ハ級とさくよ箱の庖丁と用ひて
甲は門くよおろるのけだんや一はらつてい
ぬるもよも口かひ口松よまらりしはる極
んごんご極うちの葉よこらもまらて世よつ
おひは夜は夏も結とそや暖をまらとら
ううねの枕の上解くと花やうよまへて福神双去
乃中双をいよまらすつよまのふておて夕への
うさもまらこらりおのりふ髪は扱もまらでま
いとぬらぬのよまらる松の内いよ短く室はあり
七精うはまらづりりけの柳と成て神を月はある

そのありゝゝ恵は次土器カハラチうる程は睦月もどぎてに
 さらさらは梅り日ヒざゝゝの外はまめれた垣ぬの
 草のえおるよ千大根の一は声もそるまを有るもと
 おとゝゝらうらゝあるのくゝゝゝゝゝゝゝ大根の梅り地ふ
 独活ウツタ蕨ウヅつゝゝゝ梅の芽とやゝあづるん此ぞす梅家
 煮のむむびゝゝおれがまゝの桃のむむを煮のむむ又
 たりゝ柳の巻よハ梅は梅りゝ梅子つけてやうおあ
 ると梅りつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 田舎井も又由ゝ網やゝのむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ぶのおりもいつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

毛ゆて卯月のをいゝ歌あるよ物給さるゝゝゝ
 卯屯新茶は夢灌仏のあ新氏のいゝゝゝゝゝゝゝ
 めてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 おやつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 めも経念いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 穢と惜まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 啼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 よぶありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 のゝ中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ら代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 男めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とて入梅の端をむつゝ一紙より七紙の折すをかれは
 うきうきとあぐはとほふふの虎狼よりおそあ
 ーとやすおろし一茶本くして夢を打志然りて
 夢ゆそれと一二夜の苗よつり晴て水雲月の光
 てりらとるま七羽の入りぞあるよとえんごの牧屋は
 色艶質とかがりす其夢の本は後ハ價のなる下と受
 むるとぞせはあうーと小車はあへどあうー海了は
 こぼすやとあぐあふくちどころよかなくは改めく
 夢時とゆりとりつへー十五日の朝まごはは夢は走
 呼かゝ太夫の志るーあゝあ牧を夢ハ序やさらたハ
 くきこふおとづらとを淋くする思ふこといふと

ふいはく秋のふもあつゝ風とと種冊行七々ある
 六日あつりのを又あぐおうーとせはらら右教いたけ
 あれたあうー何とれと夜あるもごんこといふあつと
 まして盆挑灯の夢とらうなごんものせさー結ぐと
 いふはる月果のまけは中の陽音のやと火ついで
 あく清てありのかあーさうよふ火せん香る牡丹
 とらふ夢をあさ秋の花とえせて能徳の式よふお
 さまるむべなりらーと夢内の面を月結んよあ
 おやつらあつとやうて晴後まで梢の葉とらうあ
 時初草松草の夢はくうーあつものよや十あ火のそ
 やとらあさまり清光星よりあはよ濁り海くとあ

う一掃受すままでのいひくそくひく一室紙は師の
 くの句を心づくしぬぬ本がう一掃又紙の調子こい
 角一それより紙はせよりやまらりて紙の音なりや
 よまへ葉とこいひきさうこいひきあめのことくぐら一さ
 夜のもとのやみ輪とをうけくをた声え枝より乃
 くのあまぬづみずこけの月かまけも紙て紙はゆ
 する葉葉のわんた紙言の選よあつるもやまをさ
 おやめり始りう一室林柚子る柳杜崎の紙を紙が
 中は懐子一たる男の古倉呼吸こそおれけはる乃
 かくひひあむよぬぬあまよひきてあつるよあえ
 葉の音はがらうらうらうらよあつる紙といひきと

心陰氣のま音のこ紙さようらうら紙を紙しそ
 くさあむおもて紙ひく日記いゆくやうて十二月の
 一昨日もあつるそくひく紙とあつる紙すて炭炭
 人もあつるこあやみ紙の草あまひけまう一さ
 あんそんはくは紙紙の清き紙とあつるよ細く
 紙をさるのこくひき紙よ紙一炭炭紙一さよひの
 紙すうらうらけ一紙よ一紙のうまをよま紙
 こさけあつる紙のこらけのまが紙るよあけある
 紙具の紙紙よは紙紙よあつる紙はらうら
 とあつる紙のこくひき紙よ紙紙より紙紙柳と
 こくひき紙よは紙紙よは紙紙とて紙紙の魁と

いふ本草より第一は酒と兼て筆とてぬぬ

二 酒 備

飛 溪

漢書とらいつる少くは百葉の長雅有其實と後
柳の巻は遊子の巻と巻くとしてるよかひ春のハ
はたのうらみと酒を立せるまのたのしき屋敷の
七器は年中の邪氣と除くより無事乃良也
桃を梅はこれより一く年内五ののかんあハ
首蒲よりどののまわりは媚ひ七夕の素麺は虫小
あつぬやのうらみとや菊のやあはれまのまのまをたは
つけ鳥とていふていふのまよはつて後一巻も

素面スメンよてハ心りかへ一婚姻の純子よハあはれお蝶は
とていふとがなり一花のあはれ物よハあはれを大根を立と
好むは有よハ唐菜と号し一あはれよハこすコキとてい
ふる唐の二葉は一珠玉と飾ハははるまのやと毎
かけの座ハ風流をとり中一た様と兼一むそり
琴と鼓一符と賦する之の友は交りも世をの
力誠信でハ華中よは錢あさくら化やすん夜は
名はよ傾け一茶碗の二葉ハ響くの形ハよ
他は所りの深更よ婦三つうらみとめてる時の
需めとまのこころむける夜よ其意の味いと
知へ一樹林とていふと愛とていふハうらみとていふ也

初葉とらふつけていらるるをれも由らる大なる
通一自然よりある六別まの来とある一
松葉とある又た門下は大憎せし和尙も下戸
あつぬとそとやのありける中は師もなる高王
とそを周の代よま一海ははよんからや其のあふ
らめすべて悦ひよつけ遣ははるけおあきてあ
一口をさすうらに誠よ世衆の心物也なり予も
ありり一よあはれとそ一と文より武よりつり
小戸中戸と越路して聖賢なるらありつら
こつら大戸とるるづらつらよのめとそ酔とあ
と友とらのそとそとあつらり自よのせ

がこそと一事ののほ何とらいらるるまよわいして終官
令方とあせとそを懸せす元教秘法の切も疎く
系す一のあくあつら一とつらやあつららんや
二とせとらりの福よ杖後のよるうとそあく杖のめ
とるん地とそや又あつら一よ母の胎中とあつら
子福生とあつら一息下戸とそ後とそ昔とそ是へす
と海とある田友とあつらつらとそあつらつらあ
つ日の病よ其来とそとそとそとそ友よ及や
性病とあつらつらとそとそとそとそとそとそ
若て若とあつらつらとそとそとそとそとそ
あつらの吉とあつらつらとそとそとそとそとそ

うがうかきうは計、魚と頰のともを交はせうすまん
 中は是非等からの七か城よおのの剣と明ひーが
 それもちやもといとせ余りの昔と成ていーおすあ
 まよと違ふ一生の變化かへのか一顔二生とたりの
 としつーまた後さよ志うすはるのまづたよーり
 ぶるゆと知ていまは生の死よ志うするゆと志うは
 いひーうおのー生の死よ志うするゆと志うは
 まゆ又費して大上戸と信うはゆー

二 餅ノ解

六味

情交あり六味といひの情交よあはれと出た

情弱の二病まうして情ゆあとおてー又解とおはに
 今ハ昔ゆあの後ゆりて好セーが今うつ其解は種を
 つづきて豆粒とすては王子献め〜好む竹の皮は包
 そのとゆ〜は誠よ一日して君さう〜たや〜つ〜く〜よみ
 がけ抱とおする〜月と〜く〜おは〜うりー初を
 初〜の好むと〜あ〜あ〜は〜流梅と〜いて
 情ひ喰色れ〜つあり餅の〜〜〜あ〜よ〜と〜は〜
 は腹の款よあ〜の果ハ赤い子のわ〜ためと〜え〜
 粒ららずまよ〜らつ〜壯より老よ〜る志〜は餅子
 何抱そや〜てそよ餅の人るよ利ある今又よ〜い〜
 抑和訓よ石洲の妙よ〜て契沖好余り好の志る〜

よつしつ況儒仏の徒とやされぬはもたらせぬ下敷
 にくくつりわらふよとちらぬへに創せしむくへは海の
 ちちし海みぎの通顔あつそとちちの園かみの形と
 力よそたしへよそ滋味といへぬいひこれよといし
 いふはいふもたしつるよそいひくもたつりあんと
 といふくもたしつるよそいひくもたつりあんと
 いうるあつとむのいひはつるあつとむおかんといふ
 児女子のいひも美かみと其とのちぬあせどいふま
 ちよさつりぬるや海よあつとむるあつとむあつとむ
 りらと松葉せしれつるつるつるつるのふは海
 さへやの破て草解のまかりしも松のふはつとむるハ

つむね悪かのくよもりてかたつくまむつる自然の
 乃といへへよよ海よとちちつる海よとちち
 我是よそ人非あるあつとむ人非ありてよよ海
 よもあつとむつるあつとむかへて市中は餅とむさく
 おのこつとむつるあつとむかへて市中は餅とむさく
 注すへ何そ海のはとむさくすはよのちちのあつとむ
 交りあつとむ餅つるちちの風味よつとむつるのこ

口 梅の夜曲

交梅

山崎の尾はさつりあつとむつるあつとむつる
 せと枕とゆするつるつるつるつるつるつるつる

とせしはすしも糊すきよとくふるふは杖の原
あつて着づる朝の世は世にまをかりてのや世あや
にくや世せんぐ世はる一たかりてしよはぶおん世
そむけてうちもねあん侍世昔の藤武り丁のねは
水世のあよ横さるりあつるさくうつ夜あらく世あ
初拍子もあはれは海山をゆて水の万里まてる世
いあ一もあぬの世は海をて世川海秋の世すす
かりる世とすむぎよう世山里よぬもなまうづか
新とおりの世あかしくよぬく神祇丁の海うおち
そへてもうくかろくかろ夜うつや世の世あひあひ
世もあいとせめてあゝ世一うん玉世あ乃とあん

あいさあのつはに海とうつあ一とやいふ人をも
人さへもかゝるの世はこゝぬやあつらん朝世の世も
やよんて風の世のつてあゝ吹されく志どろもど
る世拍子まうしも世ま世とや君さうまう世

ト完 桃 詠

向日氏ト完 世平十六の世より世世つよ今て世中
よん世のり世子よあこのうもいりあ子よよ世ト
よん世のよ連一なるもとそら世よ廣一晋子も
集あ世の日は必まありて是つんと求あ必描あや
いふ冊のりあト完のつけ一そそそ桃あこの

若武治はむかし一時的にまゝ榎林の邊ありて
以下下石ありりの律儀をおやうとすあはよ

白果くそと錦袋糸といひてたて

とあはれ若の匂えかゝるおろしうも若は親が災せし
人へ教十人きり申すも二十秋仙の連中へさき此の
道とありといふ能く辨るめせしれとや下使と

猫のつまま支ぬといふもぬひりり

と啼きて廿人のお仙は撰るるされど若は涙は涙選れ
ぬ涼くけりりいふ炭灰の枝へ焚ぬ昔のまことおひ
古よの葦は曲るるあはまれこころつらひてよりつら
死び云任の賜と探り比の蛙乃あ音と歌んで終よ

中具一流の面現とむられよりいかに訪るせむ
徒布のぬくつらまりやのいゝ起りておのく一人の
名を呼ぶ人いぐさくといふ教とあはれまはれ末のあ
りこの下ととおもひていせのあはれよあはれ
氣と年と人同くいひ誰さそあはれねどあは
奈との内とけりもとちりていふあはれいひあり
尾湯は月空を指すといふ一延享甲子の始れあは
は流きてあはれいひ下使のいそぞろあはれいひまは
人のあはれあはれいひいひいひいひいひ下使の
坊のいひあはれいひいひいひいひいひいひいひ
九十二歳のいそ年あはれいひいひいひいひいひいひ

薄く毛のうすかなふんまぐらうくさきくよ
崎をまて穢世もあさひなうーてんおれどけとたじ
捨一句くはるふおの穢世あへーとたていよま及
ずとてふ即是也此理と示して程なく息絶り
と苦ありぬるも歎く交りーりたさーとて茶室
ハとせたりよあんとらー百里の外よ在て其はの
か持水ともあさきさりーとそやおあさうさあせ
生涯いたよすきぬひーんあれいづの佳句あは
あつとーいふくもあさう昔あるも茶小娘の布子
の袖と白よあさうとていほある老姫の珍贖よ
くぢすふお成りこの電が

と紫衣の代句して冠里候の感歎よ歌りしを
け雙のうや也らり其冠里候も紫衣も皆黄白水
の先客あさハ名留ま度れ舞はまよ詩うけ
あふんとてあひくおやへゆりて

庄嚴とさそやあの世れ被岩なあ

六 碧茶書函文

六味

碧茶辭

阿の昔いつきの時よりあらん生も廿日余り山楯
咲るはあふよさそをれうーこのふんく保めて
ふとりあふこの乃よんやそ記棄の落す夜よ

見ゆかきくちるるよおめりたあおあり後か
ぐりいす世のおはくしよめけいよあま
る安のふよいしよはよめいんあま
むまよりけいそたんきハ茶庭の柳おあり
糸くちあまうぬままじやのうあ
むつあひりあまきりすりよあ
やとさくあよの通ひぢももあ
大をあれらん情お園のまめごと
あるへよいつ秋風の吹ゆてり
恨とぬておのつり春悲れか
あおそのあふりかけてあまの
つたあ

の白音うすりよあおあくとあ
うつよ勝とんこのとされあ
あよくあなる聖のゆ代あ
不意の情え外よちゆるい
とくもあなるあかんあ
あつへはあすりあ
あひふああひさりとて
悟り茶葉の隠すあ
あといふああ又てあ
あ茶の解

風吹ぬよ空を熱とさげたる後よ一車草の火よ一杯のあ
とやいそんされはさきく流しはさうしよ本立よ此後よ
降り雪の志はれ涼氣とこや一紙竹のそよたおのつり
りて一局の上よ黒白の石冷^{ヒヤカ}りて顔然しは海
態然るをば師教は法一白の丁ことす其意は寂
然たる徹や棋局も去来と消すとひらんむ也く
りやあさききて見わらんよいさるるも枯ぬ
へそくはあうち勝負と収むされの家山ははし
河岳の教もいあらうらんことを秋冬湯と右にけ
其意よ神を旁一誓古よよまとして終日空後のう
こころにれ堂仲尼のむしよまらわりののみ教はん

好きて畫める人ハ好みよめきて換める人ハ好むと
あつさるとそわくを恥^ハきよあつはけ境よます

書 箴

おハた藝のつあて人のとくさふへふ業之有共ハ
好くおくま口の本れ出とあふ初めよあらはと
ゆめよそ何人の化まるよや^ハ十八韻の自在あるより天
地は^ハこれよのむすあれとて万老は出もよめはと
半句は^ハかといをけられたりせんをとありめて
そよ上ハ出れと又孝も婦も^ハ器用次第よ^ハ其人の
家と成ハ^ハ讀よい^ハ讀りよ^ハ毎用とあつ^ハ好く^ハ好下
ごぬのよれハ^ハ指し^ハ是^ハあ^ハさ^ハつ^ハ藝ある也^ハ好く^ハ好く^ハ

あつた百の年よりさういふ十年來聲流の一流日東へ
流りては唐山の無常りもあつたねと笑を好む人婦
の考かれは下北能也としてを考より家必上代の
依理即成中といふ古新流はつら失ひて明季に
海を浮き舞と慕ひつゝ晋唐の向上はさうのやうにハ
古帖は黄金と費しおのむ一人ありと思ふ思ふも
亦あつた守まへて出といふりのハ其人の位までを考
の書記より士大夫以下唐人を好む律義一遍の啓上
よてかりおとつてあつた所と考ふといふはつらつら
中は僧徒儒醫のれ文藝の考あつた名神の部
あつては江も俗塵と交へすしげさく書すへさあ

自然の権柄への何やと女学をせし人を好む一そを
考ふ也項好く出ハ姓名と考すのそといふ東坡も出
名姓名と考すして体すと論せしむりハ錢本の
莫勇ひつゝハ又女子の女子それとして下まれば
と恥つる知言おれハ始より無常同然也女子もハ
こころと引きた中の素美の牡丹梅あつたといふは通用が
為一也としてはは信たしと出ハ俗筆ハ表をよハあつ
かつたつらして黄金把つたかき一素上も天下に
律よそむけはつたあつたせんも出つたつらハ其時
人のあつたつらといふんやハ賈客の候一さか二王
の第はこは媚ハ妖俗の點あつた女女子の整つた

うつまつしきと女の形と立ちて飛人の人近せ下妻
とくくく彫きつるつととけりにしてとけと信る
信人様とぬすむ侍人と殺す醫士坊お合座合
つあおとととと来ると日と費と石摺と光陰と
あつひりいふのん信と初とすう文明の能徳あれ
太さの苗圃と信して君臣の方一とも結せよう
我く無て来あるものと悪あるは安あるとやんかこ
さる儒士の理帯のとあつてしまつてうとせある
のむは色よとけりぬれ文のつわてよけ歳と後け
つとつ一大枝事とつとる

書論

刺と画くもの其香と画くものけいさくといふ
をねとあつた痛くつ痛の日と絶てはせりし
王維の画の擗川の景と聖よりけつとく保めは
よかこにありつとよありはよはけて掲えね
とどりよ折志けつとる候くおひんおのつと
このある風情まのあつり其地よけけさる思ひよ
精神さつとやうよ其日よあつと痛うらとるけい
は後せつとあつととて面おさつとあつとあつ
り絶よいものぬれつと後よりける女といひ画解の机と
つとつとつとねむいふのはととととととととと
ぬえより浮生の繪とつととととととととととと

百家の彩灰といひ蛤のさうず貝とやらん何や一
疾^疾湖よまどひて子^子賤^賤行も補^補之^之梅も其^其能力^力
事^事ひあると知^知つらんよ^よ画^画も甚^甚とらん人^人と云^云一
力の又^又素^素とめてやのめ^めんお^おう^う鳥^鳥有^有先^先生^生あるの
ありて難^難とて曰^曰ふ子^子いつとよ^よくせるやと^と云^云て其^其
術^術と云^云すすと先^先生^生笑^笑て云^云う^うは^はる^る痛^痛之^之我^我の^の意^意よ
熱^熱して日^日用^用の^の茶^茶飯^飯とすこと不^不倭^倭われよ^よく^くは^はん^ん生^生
中^中術^術よ^よお^おして^{して}け^け甚^甚と^と侍^侍あ^あり^り何^何と^と云^云る^る何^何ぞ
白^白髪^髪と^とい^いて^て家^家に^にす^する^る其^其服^服の^の人^人あ^あらん^んの^のし^し
子^子は^はあ^あ母^母と^として^{して}云^云う^う蝦^蝦の^の眼^眼と^とか^かん^んの^の鳥^鳥有^有
大^大よ^よ笑^笑ふ^ふこれ^{これ}と^とり^りて^て四^四巻^巻を^を結^結文^文と^とす^すや^やい^い

七 士農工商、各

交換

孔子の曰く一と指て十と合するを士といふ^{ホコ}ある^{ある}と^と止^止る^る
と^と或^或とい^いひ^ひ十^十は^は明^明か^かある^{ある}と^とす^すとい^いふ^ふ十^十は^は法^法の^の終^終なり^{なり}
一^一は^は場^場の^の始^始なり^{なり}と^とや^やされ^れ一^一ぢ^ぢと^とか^かぞ^ぞ十^十ぢ^ぢと^とい^いひ^ひは^は
始^始終^終と^とある^{ある}の^の如^如き^きい^いと^とい^いふ^ふ子^子訓^訓は^は出^出身^身なり^{なり}と^とや^や別^別あ^ある^る
ち^ち社^社代^代の^の歳^歳祥^祥^{イカシ} 祭^祭禮^禮^{ボコ}の^の形^形容^容なり^{なり}て^て麻^麻苧^苧香^香取^取ぬ^ぬ社^社
かれ^{かれ}十^十と^と一^一と^と人^人の^の大^大な^なる^るを^をや^や世^世の^の士^士め^めく^くもの^のと^と見^見
る^るよ^よ敏^敏面^面は^は感^感と^とか^かや^やり^りて^て農^農父^父の^の乃^乃と^と流^流る^ること^{こと}と
外^外の^のあ^ある^るは^は小^小権^権と^となる^{なる}よ^よし^しめ^め様^様む^むら^らひ^ひの^の足^足踏^踏かけ^{かけ}致^致
し^しむ^むと^とい^いふ^ふより^{より}よ^よき^きの^の人^人は^は多^多し^しと^とい^いふ^ふは^は

百家の彩灰といひ蛤のさうず貝とやらん何や一
疾湖よまどひて子賤行も補之梅も其能力
事ひあると知つらんよ画も甚とらん人と云一
力の又素とめてやのめんおう鳥有先生あるの
ありて難とて曰ふ子いつとよくせるやと云て其
術と云すすと先生笑て云うはる痛之我の意よ
熱して日用の茶飯とすこと不倭われよくはん生
中術よおしてけ甚と侍あり何と云るる何ぞ
白髪とて家にする其服の人あらんのし
子はあ母として云う蝦の眼とかんの鳥有
大よ笑ふこれとりて四巻を結文とすやい

おのちよはたれる者とせむるに勝てはるの弱きものと
 ありしころぞなごころ又さううう勇まんとし磨いてらうど
 の山よん越え入るを恐るひこみおの古もよ程の一洞をむむ
 やうう己よむるころあふより首をむむ妖怪と世はよー
 する幾とさのさあさくさくさかたを画くものまじり
 みて魂とまひし一むひあらんしん一登のうへに剣槍
 射師砲のむすすて何と^{ナニヤ}と叫ぶさうそやおななせ
 する砲の發はるぬもいんうううー士は万理は通せ
 ざればを退く虚を突えんえやー又公学をんまをば
 右よいつる登とさる一己の残骸とあどるこれらおよそ
 いたん抑もさのむや廣さるひ子もあは後れさるる

火の火槍よ起これい見其まよい中とらんくー七つの
 ことと右によあまん一應変自在の舟は布とさし
 詞よ志ころとうの神りし一我文字より文章よ傳へて
 実ふあうたうぬうあ其先生も指さるの沙汰あれ
 又いづりかすすや夜よとこの方人よ将として士卒を
 指揮するはさ大砲の方すく其あすとして先人の慮を
 めめ叔百方よあ及やせはるの時代の利はる人れ
 和は夜よ自在ある一是はかつかうるれ城は築とおす
 同一あぞや其公学をん夜のはは百方の奇正と吐け
 してそのさよ一人同士の術よさく一己の残骸に
 りよあくやけぬらんそあはま一はれはさハ一己乃

藤とて愛ひぬが是大軍の分一ありてすへてさる
りのさよつなうれはるは武士つはれぬやちん只をすく
余力ある時ハ清誓のありとて探りて風難とらぬ
んよち孫子う十二の篇も虚言其ハ高よゆらふは死
の要よ踏らぬより一夜の指れりぬとて方のあるての
と高とて心裏の出信起る孫も改めりて改めとて
止め十一とて高とての武士とハ行くあり
「武士よハ氏の称あれハは農よ百姓の事ありて
丁百ありす其十六とてまらぬりてとてあるハ一先ハ高の
苗代ハ高を義とて高とてぬ部とてなく田植ハ高れ
は高の川流とてりて秋の収めは高とて真とて并げり

法の苛^{カラ}りぬより種よ種とおおの小槌乃^{カラ}連^{サホ}祭に
は方ハ面兼とおおとておらんこらぬとてよも
むとてりてとては種のもたやとて高の種先よ
高とての種とて高りかやの種は高ハ津夜の種と
ぬとてとては種の高とてやれ早の種ふるんて高王ハ
時よ何とて高小町ハおられりハ時何の種とて其方高
安とてん高よとハ節序の種より地裡の種は高よ
高とて頗大佐あるハやん百姓ハ思あるものよハ
高とてりて高とて高ハ及とて高とて物の変化とて
高とて高とて高とて高とて高とて高とて高とて高とて
種秋の種加とて高とて高とて高とて高とて高とて高とて

不易の功業といひ、そのまじりのまじりとて、
徳りをもく杖よたすけられて、老圃の吟と業を
いへ、変化といふ業法の株といふおひれの也

おや中三の工よありて、ほろとていふ人農より、一
階級まで、種理の交わり、祝能準繩よおのり
ふのやうといふいりあるを、後世もけり、たくこふ
り、すつて、いひ、ついで、世の勢いといふ、六新始株上の後武
あり、一、舊も田の素絶うつて、ろひ柏亭といへ、一、終文
いへ、とあやういふ、み上ぬる、さ、この秘は、も、鳥兜のかちも
すて、お、深ぬまの加、後ある、一、や、たるよ、おの、祖神ハ
殿の、お、子ある、一、秋明、おの、朝よ、い、殿づらりの

ゆ、活も、あ、り、る、よ、お、や、つ、つ、あ、一、番、道、一、い、ふ、工、の、株
よ、一、て、根、の、お、さ、と、換、り、ひ、あ、り、も、一、元、山、の、内、よ、味、た
お、大、子、と、あ、赤、下、の、う、目、あ、り、て、行、お、け、る、け、の、内、も
い、う、よ、あ、り、る、お、り、ん、た、ら、ん、て、日、く、し、く、し、あ、る、お、り、
あ、り、も、世、よ、良、材、を、い、う、ん、と、言、て、い、ふ、お、り、て、女
け、の、表、と、あ、り、て、さ、ま、あ、の、裏、曲、入、と、あ、り、い、ふ、お、り、
材、木、の、い、く、も、い、ふ、也、さ、と、そ、こ、の、あ、の、あ、り、あ、り、て、お、の、ま
く、り、用、と、あ、り、一、む、お、ら、は、い、感、れ、深、お、の、糸、帯、あ、る
一、と、い、れ、一、さ、ま、下、よ、一、人、の、良、と、い、ふ、と、同、う、一、と、い、ふ、子
り、苦、勞、か、り、一、標、の、末、を、お、て、つ、け、い、は、い、し、し、新
る、一、と、い、ふ、と、愛、通、を、方、と、い、ふ、い、ん

新編 皇極經世一

社

又商の上といふも其筋を多し一箇よりして其
 町のいづかの山よ日本之光と争ひ賣らざるは
 炭を賣らざるをよも其筋を多し一箇よりして其
 とせんや乞と若しと云ふんやこれと秤を賣て尺れ
 百強盗も秋風切も尺むぬ方を安かるるなる者
 物らの名を多し其筋よ木の葉賣ても云とつむのほほ
 とやいさんされと木の葉の目より尺す尺の換がまの
 取きてたてり百貫の値すすはよ其果ぬんはばま
 しかすや乞皆利倍と合するんの人あるはよ其賣よ
 うとたはやまらぬんはよく虚を賣れ自在ぬんは
 此の換もほしくこの値をほしくかくてぞ其賣

のありえんちさくく其筋よ此の世とやういふ人其民の
 上と出といふ其農工商の上と云ふ其職よぬいづか
 力出傳秘説の何んともいふ其筋よ此の世とやういふ
 これも亦も其賣と云ふ其筋よ此の世とやういふ人其民の
 せは衣食住の上と云ふ其筋よ此の世とやういふ人其民の
 是をかくていふと云ふ其筋よ此の世とやういふ人其民の
 換ふれ用も尺いふ其筋よ此の世とやういふ人其民の
 志りあれば仮借は錢かさぬらうの三民う及ぬ其筋よ此の
 口の路は度するもことなりあつすや其筋よ此の世とやういふ
 合ておの通う職と云れはけられ替えてくはるのぞ其筋の
 替へて其民の中は帳とつむあるへと云ふ其筋よ此の世とやういふ

任の事此造次難滞しもしつゝあふや

八 松竹鶴龜頌

飛溪

此まの三樹は士農工商の好ひより松は秦出西の口つと
賦せり又孝小哲とんと、竹は六味坊り抱すきあつて
文字の飲は破る友垣ありそらそれつとて鶴と亀と
つるよ僕松竹鶴龜を好らるればや四季並難の終り
祝ひといふものあもいふはあつては民の善の徴たる
に對して好むとらひひで傳へんと誓へ工業とこし
いふらまごちめさるるはりたを好まむてんよ松竹の
を人まぬれおてそは世よめていふてたを好む

あり昔はの耐らぬといふ中よあるま半と腹せしより哉
ふ巖とあふいさほおとおうすい植の聲よして響くと
すまめ自免と好むとむらち仙史の凡流とかる楠
よあつて石ともあり太度の棟梁とあつては明堂の
柱と削るたまの爵とぬりしつゝ鶴の好ひもあつて
あつてはよらかひそめ松竹の抱そをいそふ家世の音
おのつゝ顔とあつて心平とすまた君子のこゝろはも
むくらんりしとせと好すしてまぢよふらたをいふ
をていふまぢよふらたをいふまぢよふらたをいふ
射るまを記せしよや松のふとせのまぢよふらたをいふ
とをていふまぢよふらたをいふまぢよふらたをいふ

松竹鶴龜頌 飛溪

同氣お求めてよれたやうに本わらんと思ふに心り
 さらうてもあひこの松丸あつたさうさうの備あると
 花より勝るといふ古々の愛ゆめらん友よ交れした
 友よ竹といふ居士も七賢六逸よ交りて、好物の
 涌ふ飽さぬ友と称せられてさふく候もかす
 大ある、おれよを伝ひ杖と成て、老とすけ、兼雨よ造
 せ、ハ風とあつむ、河、雪、中よ、稚子、おれ、せ、ハ、孝、感、代
 御し、ゆる、湘山の中と深し、ハ、二、妃、の、お、後、と、よ、通、す、と
 して、ハ、冬、夏、よ、深、布、碎、玉、の、お、と、表、し、現、個、よ、如、暢
 あるより、茶と圍むよ、丁こころも、竹、樓、の、お、後、の、あ、や
 中よ、この、中、よ、茶、お、と、尋、し、ハ、お、審、ら、凡、骨、小、回

原竹よ、空を、城、と、切、つ、る、末、代、の、お、地、と、して、を、を、乃
 林の、け、お、かり、ハ、お、子、お、よ、か、て、今、上、面、何、う、ハ、庫、よ
 納めて、す、お、の、お、纏、し、せ、り、い、で、や、中、よ、お、雄、何、り
 ち、お、よ、と、ま、ぬ、お、そ、お、ま、の、い、く、よ、飾、を、世、よ、あ、し、お、れ
 お、始、こ、り、す、め、く、た、お、松、竹、の、上、お、鶴、の、い、る、お、大、禽
 有、て、又、お、り、深、し、百、六、十、も、い、う、て、お、雄、お、祝、て、お、り
 む、お、夏、大、夏、し、て、お、ま、を、白、く、お、赤、し、ハ、天、お、あ、を、お、り
 へ、う、い、子、お、百、年、い、う、て、お、響、風、同、く、お、解、と、あ、す
 ち、よ、お、あ、り、と、ハ、鶴、の、一、お、れ、お、ま、と、い、う、お、り、腰、お
 十、万、貫、と、お、申、て、揚、別、よ、お、と、ん、と、い、ひ、ハ、癡、く、よ、ハ
 別、る、へ、う、す、お、費、お、れ、お、と、の、せ、て、ち、お、お、ま、と、し、を、お、り

李梅之選

卷四

五三

と世次又懿この家跡はやらりていづりし車あまの
 夏よおうれた拍波あり之保の松原は仙會玉羽歌
 うけてる歌よ終きて誓ひらるるよ漢又ありて玉羽と
 るるると天はしせとほむむさあづま誓ひの曲と傳
 へて玉羽とあせりしり天は傳りしと八時よあてれ
 傳りて誠とらゆらる漢又しそあらん信あはし
 とあらりるよ儿上と致く者よあてあてはあ香あ
 よあましつと杖とらりよあまむれらるるこれ八眉山
 が後の赤崎とあひ合ふを頗仙院は捨らぬ地て
 はしく思ひあり文彦の松竹路のこれ歌はあ中の
 感よ事足りぬるる地の一景と終らんよあゆり

あらんはあ地は甲虫三百六十種のあましそ王者のあか
 くらがあらはあ地よのつららく吉凶とあめあせ治乱
 とあま強よあまあれ神あまあへ一扱しそあまあ
 たけきあはる強とあまあめあもあまああああ
 果よあまあまあ神代より巧まあせるとあまあああ
 かくしてあまああまああああああああああああ
 ごとくつがりのあまあああああああああああああ
 由てらあまああああああああああああああああ
 こそあまあああああああああああああああああ
 あああああああああああああああああああああ
 國ああああああああああああああああああああ

李撰文選卷之四
尾
有りすべし。されども、是れ亦、傳へて文明よつて、女子後、かす
二箇のふも、か、こ、う、せ、て、及、よ、な、す、り、の、言、は、れ
矢、ま、と、似、い、叙、ち、本、刀、の、心、練、と、年、の、口、民、を、よ
業、(中) 御、お、の、く、其、所、を、切、て、口、言、ま、す、く、妙、不、に
る、ま、よ、こ、よ、は、世、安、民、の、清、直、を、書、り、よ、と、せ、や
八、ふ、と、せ、よ、松、竹、を、地、勢、れ、く、地、を、と、活、て、何、あ、と
即、ち、く、つ、ら、と、同、く、さ、ま、あ、り、國、は、人、の、治、り、を、
ひ、よ、の、よ、ま、は、る、もの、す、く、今、お、め、と、志、さ、う、め、り、を、

李撰文選卷之四 大尾

叙李撰文選之後 狂語

凡俳諧乃書序を見よ、守武の
十句、歌與書よ、下、寛永正保
乃、厚、お、つ、つ、家、ま、と、ハ、歌、林、の、諷、詞、
縁、語、み、ら、わ、て、滑稽、淡、笑、者、言、故、
は、一、へ、を、新、ハ、是、や、和、文、に、一、體、を、う、ら、
此、道、の、用、を、て、始、り、立、一、風、姿、な、る、
一、を、れ、を、延、寶、の、比、を、ひ、よ、り、談、林、の、

李撰文選 卷之四 大尾

一流起至て文章句法とも色不變次
 此体おもふ飘逸に―と屬とすれえ
 直つ^十字^十法^十もて奇字怪語の口塩梅よく
 抑揚褒貶の氣流く^十法^十の^十一^十の^十一^十
 門戸を立んとの一をちより文場一
 筆鋒をきく^十法^十の^十一^十の^十一^十
 始祖翁格採れおし^十法^十の^十一^十の^十一^十
 あまれを記―とむるに舊章一平

あらし新語^十法^十の^十一^十の^十一^十
 又元祿の始^十法^十の^十一^十の^十一^十
 有て四方^十法^十の^十一^十の^十一^十
 死實兼^十法^十の^十一^十の^十一^十
 文體^十法^十の^十一^十の^十一^十
 五七句^十法^十の^十一^十の^十一^十
 形と賦^十法^十の^十一^十の^十一^十
 を立たり五老井をやくと修飾^十法^十の^十一^十の^十一^十

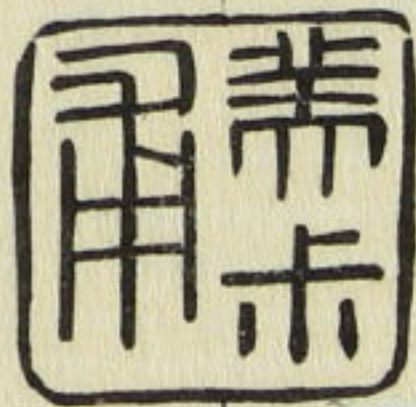
諸門人の作とあつめかの蕭統乃選子
 あらぬお次てあ花坊みよくこまの格紙
 増し文體又操やまふ作みの規矩也
 つ少擧げし體よりほかわらふ擬しある二の
 文集あまといへ毎む貯く卑陋のおうみか
 爲ぬれを正風の域かむいして一歩千里を
 あやまてわといちん深く見ゆふきうはる
 及一頃コノロ日書肆文昌堂李惟文選と

以へ教を彫刻務むとて予の云々を
 源人おもをさふ河村儀子故もて草稿を
 あふふわてる系に有李柳錦姑あふ
 六味翁の文とまふ如十章故輯めり
 里あこふ元禄の清城多のえ守泊船乃黨
 小恥事絶まふとけく志大か勉めり
 いまはらんや時ちる或此二子起きて味翁の
 遺文世みあつねたる味翁を予の友を

あしなみ成輩とせはるるやかくある小
よりなり序者

寶曆十一年辛巳秋九月

東都市隱 皐月平砂



續李撰文選

近刻

寶曆十二壬午歲

正月吉辰

京都寺町通二條上町

井筒屋庄兵衛

大坂心齋川橋筋安堂寺町

辻本久兵衛

江戸淺草御門跡前

辻村五兵衛

同通本銀町貳丁目

近江屋藤兵衛

同内柳原新橋富松町

岩井屋理兵衛梓

書肆



印

